

## 參考著作 4 中文摘要

\*論文名：廖育卿〈《沒有色彩的多崎作與他的巡禮之年》中的媒介——試論多崎作與沙羅——〉

(日文：『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』におけるメディウム—「色彩を持たない」多崎つくると木元沙羅をめぐって—)

### \*摘要：

細讀村上春樹的作品內容，常常可以看到作者對於人性深入的刻畫，並引起讀者共鳴。村上春樹的作品之所以能引起讀者共鳴，無非是作品中的人物遭遇，及其人性的刻劃令人心有戚戚焉。本研究以《沒有色彩的多崎作與他的巡禮之年》裡的青春故事，深入剖析主角多崎作與女友沙羅之間的隔閡，進而探討其隔閡之成因，並試論沙羅在作品中的定位，與其人格特質所可能代表的顏色。

從結論來說，沙羅是促使多崎作回頭追尋自己的重要關鍵，並且透過與沙羅的對話，多崎作從「自我不信→自我療癒」中得到救贖與成長，這也可說是多崎作的重生的一個過程。沙羅帶給多崎作新生的動力，多崎作也因沙羅的存在而願意重拾信任，由此觀點看來，更可驗證沙羅在《沒有色彩的多崎作與他的巡禮之年》裡的代表顏色是，代表生生不息的「綠色」。

關鍵字：村上春樹、媒介、重生、自我、顏色

林

上

におけるメディアム

春

21  
世紀篇

赫

監修

森正人(もりまさひと) 日本熊本大学名誉教授

編集

小森陽一(こもりよういち) 日本東京大学教授

曾秋晝(そうしゅうけい) 台湾淡江大学教授

## 目次 第一部

### 村上春樹文学におけるメディアウム

小森 陽一…………… 1

### 異世界を結ぶ者たち—村上春樹におけるメディアウムと

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』—

柴田 勝二…………… 17

### 村上春樹『海辺のカフカ』論

—メディアウムとしての甲村図書館を中心に—

葉 凌…………… 49

『1Q84』における<sup>メディアウム</sup>媒介者—〈ふかえり〉の巫女としての働きを中心に  
葉 蕙…………… 79

メディアウムとしての「沙羅」—『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』における光明または暗闇—

齋藤 正志…………… 105

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』における  
メディアウム—「色彩を持たない」多崎つくると木元沙羅を  
めぐって—

廖 育卿…………… 123

### 村上春樹文学のメディアウムとしての「うなぎ」

曾 秋桂…………… 149

# 『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』におけるメディウム —「色彩を持たない」多崎つくると木元沙羅をめぐって—

廖 育卿

## 1. はじめに

村上春樹の『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』<sup>1</sup>（以下、『色彩』作）は、2013年4月に出版されて以来、売り上げは98.5万部にも達している<sup>2</sup>。書名のとおり、『色彩』作は名字に色彩の要素が入っていない多崎つくるとを中心語る物語である。「色彩を持つ」四人——アオ（青海悦夫）、アカ（赤松慶）、シロ（白根柚木）とク

1 初出は2013年4月。文芸春秋によって出版された。

2 「オリコンは12月2日、ウェブ通販を含む全国書店1,941店舗からの売上データをもとに集計した「オリコン2013年年間“本”ランキング」（集計期間：2012年11月19日～2013年11月17日）を発表した。総合部門にあたるBOOK部門は、98.5万部を売り上げた、村上春樹「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」（今年4月発売・文芸春秋）が年間1位を獲得している。」<http://www.narinari.com/Nd/20131223941.html>（2014年4月18日閲覧）

ロ（黒埜恵理）——は、「色彩を持たない」多崎つくる（以下、多崎）との間に、「正五角形が長さの等しい五辺によって成立しているのと同じように」（P.14）「乱れなく調和する共同体みたいなもの」（P.20）ができていた。多崎が大学二年生になった夏休みに、突然に他の四人から絶交を言い渡されたことによって、この「調和のとれた完璧な共同体」（P.221）は、崩れてしまった。それ以来、多崎は毎日死ぬことばかり考える辛い生活をしてきた。現在36歳の多崎は、旅行会社に勤める2歳年上の木元沙羅（以下、沙羅）とは、恋人のような間柄である。彼女の勧めにより、多崎は16年間にわたった謎を解くための旅を始めた。

依然として、『色彩』作もいつもの村上作品の特徴を持っている。それは、作品の最後まで解かれていない（もしくは解くことができない）謎・疑問を読者に持たせることである。『色彩』作も例外なく、以下のような三つの謎が用意されていると考えられる。まず、『色彩』作におけるアオ、アカ、シロとクロ、それぞれに象徴的色彩を所有しているという「色彩を持つ」登場人物に対して、「色彩を持たない」人物として多崎つくるはもちろん、木元沙羅というヒロインも挙げられる。もし多崎つくと名字に色彩の要素がない木元沙羅に、それぞれ象徴づける色があるなら、それは何になるのだろうか。次に、「調和のとれた完璧な共同体」が崩れた原因はシロにあるが、なぜシロが多崎つくるを誣陥する対象にしなければならなかったか、ま

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』におけるメディウム  
—「色彩を持たない」多崎つくると木元沙羅をめぐって—

たは、「調和のとれた完璧な共同体」自体は、崩壊に至るしかなかったのだろうか、まだ解明されていない。最後に、「完璧な共同体」が解体した後、アオとアカ、クロのその後の経歴はそれぞれ作品中に綴られている。それに対し、「完璧な共同体」の解体後のシロの経歴や彼女の死因などが判明しないまま、物語は終わった。

多崎つくるとの「巡礼」は、彼女である木元沙羅との付き合いが破綻し、回想を踏まえながら始まったのである。「色彩を持たない」木元沙羅は「調和のとれた完璧な共同体」に所属していないが、「共同体」から絶交を宣言された多崎にとっては、木元沙羅は五人グループから外された過去に対面させ、未来に再び希望を持たせる重要な存在である。そして、たった3回のデートと1回のセックスだけの関係を持っている二人が、交際を続ける中で、彼女は「何かしらの問題を心に抱えている」(P.106) つくるに、二人の間に介入した「よく正体のわからない何か」(P.106) (傍点原文、以下同) を解明・解決しないと、二人の付き合いを深めることができないと宣言した。ここで問わざるを得ないのは、この二人の関係を邪魔立てした「正体のわからない何か」は、いったいどのようなものだろうか。また、その「何か」の正体の解明は、多崎にどのように影響したのだろうか。大学以来の多崎の生活は高校時代の「完璧な共同体」に大きく左右されているので、その「何か」の形成はかつての「調和のとれた完璧な共同体」から探究できるように思われる。

そこで、本稿は「何か」の正体についての考察を踏まえながら、「乱れなく調和する共同体」が多崎つくるに与えた影響を解明し、多崎の生活に現れた木元沙羅が果たした役割と、「巡礼」の持つ意味を究明することによって、メディアの作品の中に残される謎を解くことを目的とする。考察の手順としては、まず多崎の女性遍歴から「何か」の正体を明らかにする。次に、「何か」の正体と、「乱れなく調和する共同体」との関連性を遡りながら、多崎と沙羅の交際という視点から「青春小説」<sup>3</sup>と見なされる『色彩を持たない多崎つくと、彼の巡礼の年』における「巡礼」の意味を検討していく。最後に、多崎つくと木元沙羅が持つ象徴的な色彩の考察を試みる。

## 2. 多崎つくるの中にあつた「何か」から見た女性遍歴

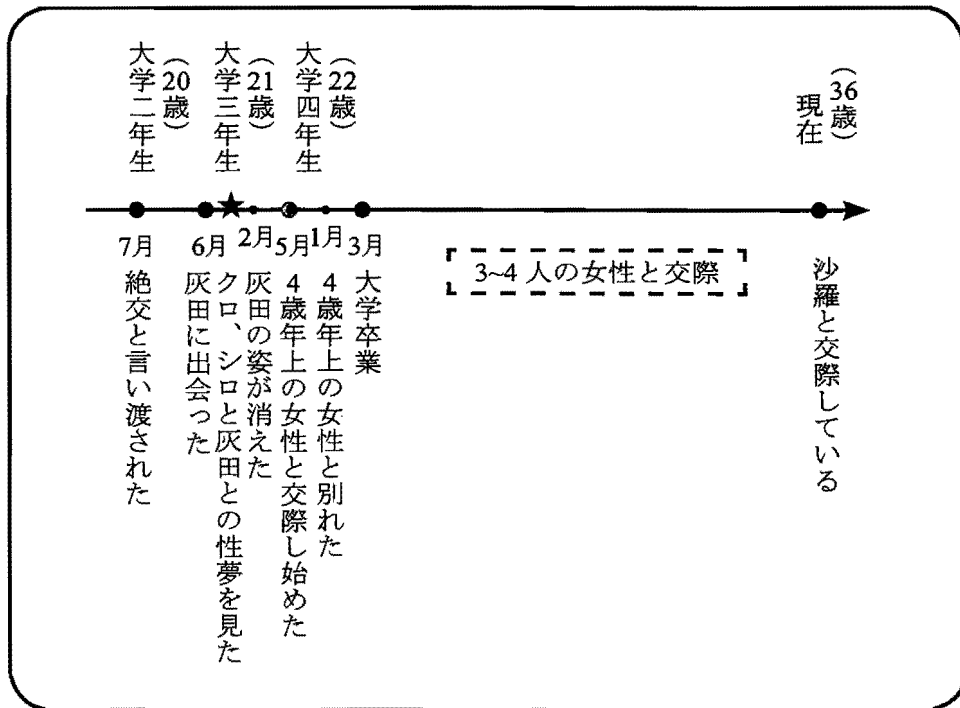
木元沙羅との間に存在していた「何か」は、これまで多崎つくるの交際相手との間にも存在していたのか。その「何か」の正体を探究するために、まず、次の【図1】から多崎の女性遍歴を確認していこう。

38歳の木元沙羅に出会う前に、多崎は数名の女性と付き合い合つたことがあつた。最初の相手は大学三年生（21歳）の

---

3 重里徹也×三輪太郎（2013）『村上春樹で世界を読む』P.238

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』におけるメディウム  
 —「色彩を持たない」多崎つくると木元沙羅をめぐる—



【図1】多崎の女性遍歴一覧

多崎が実習の職場で出会った4歳年上の女性であるが、実は彼女は多崎と付き合っていると同時に、故郷に幼なじみの恋人もいた。大学卒業直前、故郷の恋人と結婚することによって、彼女から二人の関係を絶たれた。そして、8ヵ月程続けられた関係の中で、多崎が彼女に感じたのは、「穏やかな好意と健康的な肉欲」(P.134)のみである。

そして、沙羅に出会う10年ほどの間に、三、四人の女性と付き合っていた。どの場合も、「それほど真剣」には心を惹かれなかった女の人たちと、わりに長く真剣につきあっていた」(P.108)という。すなわち、沙羅以前に付き合った女性の誰に対しても、多崎は「精神的抑制」の働きに



よって、「意識的にせよ無意識的にせよ、相手とのあいだに適当な距離を置くようにしていた」(P.109)のである。その原因は、「誰かを真剣に愛するようになり、必要とするようになり、そのあげくある日突然、何の前置きもなくその相手がどこかに姿を消して、一人で後に取り残されること」(P.109)に怯える多崎自身にあるのである。言い換えれば、その不安感「いつか捨てられるかどうかわからない」という「乱れなく調和する共同体」によるトラウマとも言えよう。そして、「もともとが社交的なタイプ」(P.21)でない多崎は、一度傷付けられた心をさらなる脅威から遮断するために、他の人間に不信感を抱くようになったのである。

むろん多崎自身はこの不安感と人間不信が内在化されたことに気付いていなかったが、多崎に出会った時点で既に彼の心に深く潜んでいるそれらに気付いた沙羅は、「何か」と称して指摘したのである。この「いつか捨てられるかどうか分からない」ことから生まれた不安感、16年前に四人に絶交を言い渡された時のことに類似しているのではないか。

ここにもう一つ注意すべきなのは、灰田に出会ったことである。「乱れなく調和する共同体」から外された20歳の多崎は、大学のプールで灰田と知り合った。「乱れなく調和する共同体」の友人たちと同じように、灰田も名前に色彩を持っている。実は名字に色彩を持つことが、多崎に治りかけの心の傷を正視させたのである。そのため、多崎は

灰田に親近感を持っている一方、必ずや共同体の崩壊による不安感も抱いていたのだろう。灰田と自然に顔見知りになり、多崎は「その新しくできた心を許せる友人に、自分についてのことのいろんな事実を正直に率直に語った」。名前に色のついた灰田への懸念がある<sup>4</sup>にもかかわらず、多崎は再び心を開こうとしていた。ただし、「乱れなく調和する共同体」に関することを一切口にせず、すべて心の底に封印していた。

しかしその後、灰田は別れを告げることもなく姿を消し、多崎の中の「いつか捨てられるかどうかわからない」という不安感を再び喚起した。こうして、このような「色のついた」人間は、多崎にトラウマ（精神的外傷）を残しているのに違いない。

急にグループに疎外された疑惑、また疎外された原因の探究不能による苦悶を抱いていた多崎は、精神的に苦しんでいた。そのような苦しみの中にいた自分を解放するために、多崎は以下のような解決法を見つけた。

そんなとき彼は自分でありながら、自分ではなかった。多崎つくるでありながら、多崎つくるではなかった。

---

4 村上春樹（2013）『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』「彼の名前は灰田といった。灰田文紹。それを聞いたとき、「またここにも色のついた人間がいる」とつくるは思った。ミスター・グレイ。灰色はもちろんとでも控えめな色ではあるけれど。」（P.55）

た。我慢できないほどの痛みを感じると、彼は自分の肉体を離れた。そして少し離れた無痛の場所から、痛みを耐えている多崎つくるの姿を観察した。意識を強く集中すればそれは不可能なことではなかった。

その感覚は今でもふとした機会に彼の中に蘇る。自分を離れること。自らの痛みを他者のものとして眺めること。 (P.41) (傍線部論者、以下同)

巨大な痛みと悲しみを乗り越えるために、多崎は自分の精神や魂を身体から離れさせ、苦しんでいる自分の肉体を見つめていた。これはおそらく、一時的な麻痺によって、心の苦しみを離脱させる行為であって、多崎自身への自己治療と言えよう。換言すれば、多崎自身が自分の肉体を〈他者〉、精神的意識を〈われ〉、という形に分けており、「乱れなく調和する共同体」の崩壊による苦痛に耐えながら、自己治療をしていたのである。そして、いつ捨てられるかわからぬ不安感は、このような自己治療の形によって、多崎の中に定着してしまったのである。

### 3. 「乱れなく調和する共同体」から生まれた「何か」

言うまでもなく、多崎を苦しめたのは「乱れなく調和する共同体」である。では、なぜこの「乱れなく調和する

共同体」の崩壊が彼を莫大な苦痛に陥らせたのであろうか。これから、「何か」との関連性を探究していく。

### 3. 1 共同体による多崎の疎外感

グループ・共同体の結成は必ずいくつか、何らかの共通点を持っている。「乱れなく調和する共同体」も例外ではない。五人全員は「大都市郊外「中の上」クラスの家庭の子供たちだった」(P.8)。五人の両親はいわゆる団塊の世代で、父親は専門職に就いているか、あるいは一流企業に勤めていたことで、母親はおおむね家にいたという点が共通している。受験校に通っていた五人は成績のレベルも総じて高い。一見共通点が多く、親しいグループになっているようであるが、実は彼らの間にある相違点はずいぶん多かった。

特に表に出されることはなかったが、ほぼ同じレベルの生活条件の下で育てられてきた五人グループで、名前に色彩を持たない多崎は心の中にある種の「疎外感」(=「差別感」?)を持っている。そして、「色とは無縁」(P.8)というような表面的なものだけではなく、他のカラフルな四人と性格上の差異があることは、彼自身もはっきりわかっている。多崎は自分の性格について、次のように述懐している。

目立った個性や特質を持ち合わせないにもかかわら

ず、そして常に中庸を志向する傾向があるにもかかわらず、周囲の人々とは少し違う、あまり普通とは言えない部分が自分にある(らしい)。そのような矛盾を含んだ自己認識は、少年時代から三十六歳の現在に至るまで、人生のあちこちで彼に戸惑いと混乱をもたらすことになった。あるときには微妙に、あるときにはそれなりに深く強く。(P.14)

実は、多崎自身も気づいていたように、自分には「あまり普通とは言えない部分」がある。その「あまり普通とは言えない部分」は、多崎の性格に独自性のあることである。それこそが、「乱れなく調和する共同体」の友人達に感じた「疎外感」である。

大学進学を決める時点になると、その「疎外感」はさらに明らかに現れてきた。カラフルな四人が地元の名古屋に留まったのに対し、多崎だけが自分の夢に向かって東京に進学した。距離によって生まれた「疎外感」が深まらないように、多崎は、手紙を書いたり、休みの時に実家に帰ったりして、共同体のバランスを崩さないように努めていた。

### 3. 2 「乱れなく調和する」ための必要条件と崩壊

アオ、アカ、シロ、クロと多崎との間に構成された「乱れなく調和する共同体」には、「可能な限り五人で一緒に行動しよう」(P.20) というような、「いくつかの無言の

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』におけるメディウム  
—「色彩を持たない」多崎つくると木元沙羅をめぐって—

取り決めがある」(P.20)。「乱れなく調和する共同体」の特徴については、ここで重里徹也の論を借りて説明していこう。

この五人の共同体の特徴は三つあります。一つは、  
存続が自己目的化している共同体であることです。組織を維持し続けることが最大の目的になっている。二つ目は、つまり、つまずいた子供たちのためのボランティア活動の共同体ということです。つまり、「正しい」や「善意」にもとづいた共同体です。他人がなかなか批判しにくい共同体といってもいい。三つ目はセックス抜き  
の共同体だということです。エコイズムを否定しているのだから、セックスは法度になる。グループ内で男女の対をつくることは、自己抑制的に忌避されています。そういうタブーを持った共同体です。<sup>5</sup> (P.241)

「誰かと二人だけで何かをしたりするのは、できるだけ避け」(P.20) するというふうに、「乱れなく調和する共同体」には、口に出されないルールがある。つまり、五人グループ内の異性の関係やさらなる小さいグループの存在が許されないということがこのルールに包摂されているのである。グループ内の誰も口にしてはいなかったが、皆は

---

5 重里徹也×三輪太郎(2013)『村上春樹で世界を読む』

「異性の関係を持ち込まないように注意し、努めていた」(P.22) というルールを意識的に守っていた。よって、このような「暗黙の了解」(=私情の持ち込み禁止)は「乱れなく調和する共同体」を維持する必要条件となっていた。そして、一旦その「暗黙の了解」が排棄されたら、この「乱れなく調和する共同体」が自ら瓦解するようになるのである。多崎自身もそれを当然のことだと思いながら、この「乱れなく調和する共同体」自体が崩壊する寸前まで、この「暗黙の了解」を厳しく守っていたのである。

なぜ多崎はこのようにルールを厳守していたかという原因を探究してみれば、それは、名前に色彩を持たないことから生まれた、(多崎自身からの)一種の差別感によるものかもしれない。その差別感を持っていても、多崎は仲間からの是認を求めていたのである。それに、「もともと社交的なタイプ」ではない多崎の性格には、ある程度以上の安定性があるので、この「乱れなく調和する共同体」のカラフルな四人にとっては、多崎は安心して付き合える対象で、この「共同体」にぴったりの存在だと考えられる。このように、特別の共通点がなくとも、この五人のそのような無形の力に駆使され、「乱れなく調和する共同体」は生み出されたのである。

ここで、大学のプールで知り合った灰田の発言が想起される。

どんなことにも必ず柁というものがあります。思考についても同じです。柁をいちいち恐れることはないけど、柁を壊すことを恐れてもならない。人が自由になるためには、それが何より大事になります。柁に対する敬意と憎悪。人生における重要なものごとというのは常に二義的なものです。僕に言えるのはそれくらいです。(P.68)

灰田が言及した「柁」を、多崎が所在していた「乱れなく調和する共同体」に置き換えれば、多崎の心に潜んでいた恐怖心が容易にうかがえる。「乱れなく調和する共同体」という「柁」を壊すことを恐れていたのは、自分の中にある帰属感がなくなってしまうからである。恐怖心が存在すること自体は、自由を失ったも同然である。自分の欲望が抑制された多崎は「思考の自由」(P.67)を失い、ある意味で「乱れなく調和する共同体」に制約されたのである。

しかし、思春期に際して、多崎の内心はもちろん異性であるシロ、クロに惹かれていた。異性と交際する欲望がその「暗黙の了解」に抑制されていたため、多崎は彼女らのことを考えるときにも、「二人を一組にとして考えるようにしていた」(P.22)。言い換えれば、多崎の心の奥には、個人の私欲を捨て、共同体の調和を優先するという意識が働いていた。その時の多崎にとって、性への関心より、「乱れなく調和する共同体」からの是認が何より重要なのであった。



### 3. 3 多崎の女性への性欲不在か

「乱れなく調和する共同体」の崩壊が多崎にもたらしたのは、ショック、混乱、疑惑などが混在した複雑な気持ちばかりであった。そして、多崎に「死ぬことだけを考え」させたのは、共同体の崩壊による価値観の転倒である。それは、前述した「暗黙の了解」から切り離すことはできない。

36歳の多崎が現在の交際相手である沙羅とセックスしたのは、わずか1回である。そして、初めて異性を求める性欲が現れたのは、「乱れなく調和する共同体」から外された後の、しかもある夜の夢の中である。ここから見れば、多崎は決して異性への関心を持っていないわけではなく、深層意識では「乱れなく調和する共同体」への懸念があったのである。特に、夢の中で十六、七歳の時のシロ、クロとセックスした場面は、指標的な出来事である。シロとクロとの性夢は、思春期の多崎が「乱れなく調和する共同体」の女性に好感を持っている事実を示しているのに違いない。それと同時に、彼の異性への関心が共同体の価値観に抑制されていることを露呈している。にもかかわらず、シロとクロとの性夢<sup>6</sup>を見たのは、多崎がそれまで動かされることのなかった信念に挑んでいる象徴である。

ところが、「乱れなく調和する共同体」の四人の友達か

---

6 村上春樹 (2013) 『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』 P.117、P.128

従って、「乱れなく調和する共同体」から疎外された孤絶感に対抗するために、多崎は自分自身への信頼感覚の喪失を通じて、彼の精神と身体を二分化した。それは、多崎なりの自己治療法であろう。よく回復すればするほど、自らの自己感覚の能力喪失と彼自身に対する不信感が深まっていった。そのため、このような「自己不信⇔自己治療」という悪循環が繰り返された結果、沙羅が言葉にできない「何か」に収束してしまっただのである。そして、この「何か」は、多崎と沙羅との間の壁になってしまっていたのである。

多崎の性夢の中に、シロ、クロも、灰田も現れたことがある。「乱れなく調和する共同体」の友人たちに去られてから一年近く経った六月に、多崎はこの「新しくできた心を許せる友人」(P.69)に出会った。彼との付き合いが深まるにつれ、ある夜、多崎はシロ、クロと灰田に関する性夢を見た(P.116-P.118)。クロとシロが多崎の性夢の前半に現れた。それは、「乱れなく調和する共同体」に対する未練や、早くからクロとシロに抱いた好感の昇華などの影響だと推測できる。しかし、性夢の後半では女性達の姿が消え、彼の射精を受け止めたのは灰田である。それは、多崎つくるの性向を暗示しているのだろうか。

灰田の出現は共同体が崩壊した後である。それに、灰田が様々なことについて「自分の意見を持っており、それを論理的に述べることができた」(P.70)ので、二人が時間の経つのを忘れて熱心に語り合ったり、意見を交換したり

したことは、多崎に精神的満足を与えた。それは自己認識に戸惑っていた多崎にとって、重要な安定剤とも言える。ただし、週末の夜になると、灰田は多崎のマンションに泊まっていた。そして、朝には料理人の才能を具えていた灰田はコーヒーを用意したり、オムレツを作ったりした。まるでカップルのような同棲生活に慣れていた多崎の潜在意識では、灰田を健康な若い男性が持つ性欲の代替対象にするのも無理はなからう。

目が覚めた多崎自身も「夢と想像との境目が、想像とリアリティーの境目がまだうまく見きわめられない」(P.118)と疑っていたが、答えが得られなかった。その答えは結局、灰田の姿が消えた後で、付き合い始めた4歳年上の女性から得られた。初めて性的な関係を持つようになった多崎は、「彼女との交わりから女性の身体についての多くの事実を学んだ」(P.132)と同時に、「自分が同性愛者ではないこと」(P.133)を証明しようとしていたのである。愛を目的とするのではなく、「大丈夫、おれはまともなのだ」(P.133)というふうに、自分の性向を確認しようとする多崎は、彼女との付き合いから「穏やかな好意と健康的な肉欲」(P.134)しか感じられなかったのである。

#### 4. 「色彩を持たない」多崎と沙羅

深い心の傷を抱いていた多崎は、16年間生きてきた。こ

れまで封印されていた「乱れなく調和する共同体」への記憶が、沙羅に喚起された。二人の関係を先に進めるには、二人の間に挟まる「乱れなく調和する共同体」から生まれた「何か」をまず解決しなければならない、と沙羅が主張した。そのため、多崎は「何か」の生成の原因を追求し、封印された過去の思い出から解放されたのである。

#### 4. 1 沙羅が担う役割

では、多崎を「自己不信⇔自己治療」という悪循環から救出するのが、なぜ沙羅でなければならないのであろうか。

沙羅の「記憶をどこかにうまく隠せたとしても、深いところにしっかり沈めたとしても、それがもたらした歴史を消すことはできない」(P.40)という一言で、多崎は過去の謎を解く旅を始めた。それ以来、終始多崎の側で支えてきた沙羅は、彼にとって心に抱えた問題について相談できる親友でもあれば、心から信頼できる導き手でもある存在だと捉えてよかろう。そして、このような安心感は、これまでの交際相手や灰田が多崎に与えなかったものである。

多崎は沙羅の支援を得て、フィンランドへの旅に発つ数日前に、彼女が他の男と「手を繋いで通りを歩いている」(P.241)という衝撃的な場面を目撃した。これは、疑いようもなく二人の信頼感への裏切りである。その時の多崎が「感じている心の痛みは嫉妬のもたらすものではな」(P.242)く、「ショックだったのは、沙羅がそのとき心か

ら嬉しそうな顔をしていたこと」(P.243)である。沙羅は多崎との将来に自信がないので、他の男性と同時に付き合うことになったかもしれないが、多崎が気になるのは彼女本人のみで、心も体も全て沙羅に惹かれている。なぜなら、彼女がそばにいてくれるだけで、多少多崎は自己感覚の能力を少しずつ取り戻していくからである。沙羅は多崎自身の過去と対面させる勇気を与えてくれた相手だからこそ、どこかに消えていた真の自己感覚が徐々に蘇ってきたのである。このように、沙羅は多崎にとって、肉体の安心感をもたらすだけでなく、「心の<sup>オアシス</sup>緑洲」とも言える存在であろう。

#### 4. 2 多崎が持つ色と沙羅が持つ色

多崎にとって「心の<sup>オアシス</sup>緑洲」のような存在である沙羅に、象徴する色彩があるとすれば、当然「緑」(=翠)であろう。沙羅は精神的に、物質的に多崎の強い後ろ盾であり、彼には欠かせない存在である。多崎との付き合いに行き詰まり悩んでいた彼女には、もう一人付き合っている相手がいるかもしれない。にもかかわらず、二人の間に戸惑いを感じた彼女は、きっと多崎との将来を考えており、多崎の帰国と精神的成長を待ち望んでいるのであろう。

多崎の場合、まず挙げられるのは、素直に過去のことを正視できたことである。またそれによって、一度消えてしまった自己感覚の能力を取り戻すことができた。嫉妬の世

界に「幽閉されていることを知る者は、この世界に誰一人いない。もちろん出ていこうと本人が決心さえすれば、そこから出ていける。その牢獄は彼の心の中にあるのだから。」<sup>7</sup> (P.48) と、多崎自身は考えていた。多崎は嫉妬がもたらした辛さに打ち勝ち、「君のことが好きだし、君をほしいと思っている」 (P.345、P.346) と、作品の結末に三回も強調し、自分の本当の気持ちを沙羅に打ち明けた。それで、自分の感覚を隠さずに、そしてそれを信じ込んだ多崎が持つ勇氣こそ、過去に囚われた囹圄から抜け出す鍵だと思われる。この鍵は言うまでもなく、沙羅が与えたのである。

「死」の考えから脱出して、長年抱えていた不安や不信などを超克した多崎は、再び立ち直って、今後の人生を明るく生きようと決心した。このような「瀕死」から「再生」へ変化する人間の柔軟性は、樹木にもある。それで、「色彩を持たない」と思われる多崎つくるが持つ色彩は、生命

---

7 村上春樹 (2013) 『色彩を持たない多崎つくと、彼の巡礼の年』「嫉妬とは——つくるが夢の中で理解したところでは——世界で最も絶望的な牢獄だった。なぜならそれは囚人が自らを閉じ込めた牢獄であるからだ。誰かに力尽くで入れられたわけではない。自らそこに入り、内側から鍵をかけ、その鍵を自ら鉄格子の外に投げ捨てたのだ。そして彼がそこに幽閉されていることを知る者は、この世界に誰一人いない。もちろん出ていこうと本人が決心さえすれば、そこから出ていける。その牢獄は彼の心の中にあるのだから。しかしその決心ができない。彼の心は石壁のように硬くなっている。それこそがまさに嫉妬の本質なのだ。」 (P.47-48)

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』におけるメディウム  
—「色彩を持たない」多崎つくると木元沙羅をめぐって—

力に満ちている森林のような「緑色」だと考えられよう。  
このように、多崎の「心の<sup>オアシス</sup>緑洲」とされる沙羅は、彼のい  
こいの場として、彼の心を潤す養分を提供し、彼に将来へ  
一歩踏み出す勇気を与えたのである。

#### 4. 3 多崎の「巡礼」が持つメディウムの意味

二人の間に介入した「何か」から始まったこの「巡礼」  
は多崎にとって、過去を振り返ったり、謎を解明したりす  
る重要な変わり目でもあれば、沙羅との二人の現在と将来  
を見直す絶好の機会でもある。つまり、「乱れなく調和す  
る共同体」に関する思い出の巡礼は、多崎と沙羅の関係を  
深める巡礼である。多崎の「巡礼」が持つメディウムの意  
味については、以下の引用を確認しよう。

人の心と人の心は調和だけで結びついているのでは  
ない。それはむしろ傷と傷によって深く結びついている  
のだ。痛みと痛みによって、脆さと脆さによって繋  
がっているのだ。悲痛な叫びを含まない静けさはなく、  
血を地面に流さない赦しはなく、痛切な喪失を通り抜  
けない受容はない。それが真の調和の根底にあるもの  
なのだ。(P.307)

多崎が求めているのは、共同体だけではなく、個人の内  
的な調和である。つまり、多崎の「巡礼」には、単に過去

に関して振り返り、反省するという内的な要素のみならず、沙羅と一緒に穏やかな関係を築いていくことを決心するという外的要素も内包されている。

一度沙羅の裏切りの場面を目撃した多崎は、まさに灰田が言った「省察を生むのは痛みです」(P.55)のように、「痛切な喪失」を通り抜けたうえで、沙羅の全てを受け入れるようになったのではないか。端的に言えば、彼女のまなざしを通して、多崎は共同体によって苦しんできた諸々のことを乗り越えただけではなく、彼女の裏切りによって彼の中にある調和を獲得できたのである。それで、多崎は沙羅との穏やかな関係を築くことによって、二人なりの「乱れなく調和する共同体」を「創る」<sup>8</sup> ことに向っている。過去からの再生と今後の人生の再開という面から見れば、「巡礼」が持つ意味はいっそう深まったと考えられる。

## 5. おわりに

本研究では、村上春樹の『色彩を持たない多崎つくると、

---

8 村上春樹(2013)『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』「つくると」という名前にあてる漢字を「創」にするか「作」にするかでは、父親はずいぶん迷ったらしい。同じ読みでも字によってそのたたくまいは大きく違ってくる。」(P.59)「『創』みたいな名前を与えられると、人生の荷がいささか重くなるんじゃないかとお父さんは言っていた。『作』の方が同じつくるとでも、本人は気楽でいいだろうって。」(P.59-60)



彼の巡礼の年』に関する「何か」の正体を検討しながら、「色彩を持たない」多崎つくると木元沙羅における「巡礼」の意味について考察してきた。その結果を改めて整理すれば、次のようである。

まず、沙羅が言及した「何か」は、かつての「乱れなく調和する共同体」を維持するための「暗黙の了解」であり、私情を抑えること（＝「禁欲」）に由来しているのである。そして、この「暗黙の了解」が正当化され、メンバー全員がそのルールを守っていた。一見共同体のバランスが取れていたように見えるが、実はシロがクロへの嫉妬を掻き立てられたことで、ついに共同体を崩壊させるに至った。その一方で、内情を知らなかった多崎はこれまで信じ込んでいたルールに裏切られ、彼の中にある価値観が混乱し、自己不信の境地に追い込まれてしまった。ついに、多崎は自分の精神を肉体から離脱させることによって、「乱れなく調和する共同体」の崩壊による痛みを抑えて、自己治療をしていた。それは、多崎の自分なりの治療法とも言えよう。このような「自己不信⇔自己治療」という循環から生まれたものは、沙羅が指摘した「何か」へと変貌してしまっただのである。

また、これまで心に埋められた過去に対する疑惑の解明によって、多崎つくるとはようやく「乱れなく調和する共同体」から解放されたのである。それゆえ、自己感覚の回復のおかげで、沙羅への思いが生々しく感じられ、彼女に赤

裸々に伝えられたのである。このように、五人の青春時代に保たれていた共同体の崩壊をめぐる「巡礼」は、沙羅との関係を見直す「巡礼」であったとも言えよう。そして、多崎の「巡礼」は、過去への反省という内的な要素も、将来穏やかな関係を築くという外的要素も兼有しているものでもある。過去からの再生と今後の人生の再開という視点から見れば、「色彩を持たない」と思われる多崎つくと木元沙羅が持つ色彩は、生命力に満ちている「緑色」だと言ってよかろう。

## テキスト

村上春樹 (2013) 『色彩を持たない多崎つくと、彼の巡礼の年』文藝春秋

## 参考文献

河合俊雄 (2011) 『村上春樹の「物語」—夢テキストとして読み解く—』新潮社

河出書房新社編集部編 (2013) 『村上春樹『色彩を持たない多崎つくと、彼の巡礼の年』をどう読むか』河出書房新社

重里徹也・三輪太郎 (2013) 『村上春樹で世界を読む』祥伝社

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』におけるメディウム  
—「色彩を持たない」多崎つくると木元沙羅をめぐって—

村上春樹・頼明珠譯（2013）『沒有色彩的多崎作 和他的巡  
禮之年』時報出版

※ 本稿は2014年6月21日に淡江大学（台湾）で開催さ  
れた「2014年第3回村上春樹国際學術シンポジウム」  
に於いて口頭発表した原稿に加筆修正したものであ  
る。